

栃木県中学校長会報

〔会報100号に寄せて〕

平成16年2月12日 発行 第100号記念号
栃木県中学校長会広報部

思い出のまま



栃木県中学校長会
第16代 篠原 俊雄

今、会報1、2号を読み、そして今回100号記念のことおめでとうございます。歴史の重さ一入ひとしお感じます。全国で最も早い会だと立入・黒田両会長談を思い出します。私の

中学校長は昭和39年（東京オリンピックの年）から昭和55年3月まで（栃の葉国体の直前まで）苦労もあり、生き甲斐もあった、16年。中に関プロ会長、全日中副会長もあった。退職後24年、あの頃中学校数188校、生徒約10万（昭39年度）進学・就職は相半ば（昭41年度）でした。修学旅行は多く江ノ島・鎌倉。後に関西旅行一ひので、わかき号から今の新幹線一やと1日増加となった。国鉄、文部省の理解で割引料金となった。あの大阪万博は混雑予想で生徒に大きな赤青の麦藁帽わらわらを被らせた。高校入試に関しては面接の導入、入学生の増員、学科の新設など要望。多く実現した。宇都宮中学校長会は市教委と話し合い林間学校として日光湯元又は菅沼キャンプ場（それぞれ白根登山）その後、国立那須甲子青年の家（赤面登山）が加わった。菅沼キャンプ場の村長に菅沼への学校・生徒が減少となることの説明・挨拶に私と市教委保健体育課長の国井克夫先生とで伺ったが、叱られて帰ったこと。栃の葉国体では県、市の中学校長の代表として常任委、式典委などを受けた。特に中学生のブラスバンドの楽器購入、集団演技のバス、弁当等の予算について推津副知事、増山市長への交渉ししば。 （中体連会長植竹幸重校長と同行）全日中では研修部に属し会員の皇居拝観、天皇に拝謁の際の誘導役。全日中の基金処理委員長のこと（最近、基金5億のうちから全日中会館購入の由）も忘れられない。特別感動だったのは全日中代表として（文部省から指名され）宮中の「御歌会始めの儀」の陪聴者の1人となったこと。（昭55年1月10日）

栃木県中学校長会の益々のご活躍、会報のさらなる充実発展を心から祈念いたします。

会報を通して往時を想う



栃木県中学校長会
第35代 須藤 光弘

会報100号の節目を機会に、会報綴りを繙いてみた。校長会創設（昭和22年）から15年を経た昭和37年3月の創刊以来、10年間（47号まで、但し、昭和43年5月に14号が41号？

となる）は概ね1・5月発行、その後5年間は無号で適宜発行、昭和56年12月に54号としてから4年間は3・8・12月発行、その後8年間は1・2月、9・10月が多く2・9月発行に定着したのは平成5年9月からである。

創刊号発刊の挨拶で、黒田会長は、教育は人間能力の開発であるとし、戦後の落とし子である中学校の位置の確立を訴え、校長は唯学者風にだけ沈潜してはならない、校長会は共通な問題・悩みに対して組織と機能を充実すべき、真に幸福な人間社会建設の担い手としての青少年教育が最重要と説かれている。また、石原校長は、教授と訓練の2つの足で1つの道を律動的に歩むのが学校教育。その歩む目標は唯一つ、道徳的人格の形成であることは教育永遠の哲理と述べられている。会報を通して、往時の校長の背筋を張った気概と、教育気運の高揚、教育の近代化への確たる理念を垣間見ることができる。

現在、激しく揺れ動く社会の変化に対応すべく教育改革が進行中であるが、社会ありて教育ありきか、教育ありて社会ありきかは、時代背景により論の分かれるところであろうが、基礎学力の捉え方や、学力低下論議等をはじめ、振り子行政に共振することなく自主自律の学校経営に努め、それを校長会の組織が集約し、教育専門職として社会に発信して欲しいものである。

第2の教育改革といわれた戦後の教育から56年を経た現在、先人の築かれた不易の部分視野に入れながら、不撓不屈の精神を受け継ぎ、教育に関する健全な世論の喚起と、新しい教育の方向性の確立に邁進されんことを願う。

〔役員雑感〕

教育のプロとして



栃木県中学校長会副会長
芳賀町立芳賀中学校
校長 網川 信一

ある時、何気なくテレビを見てみると、何種類かある魚の中からアジを選び「アジのつみれを作る」という番組をやっていました。

アジを選ぶまでが一苦労、(サンマやイワシを選ぶ者も)また、魚をさばくにしても魚をつかめず片手で魚を切ろうとするものなどさんざんであった。

その中の2人の高校生が魚の見分け方ぐらいはできるようになりたいと、魚河岸に働き勉強に行くことになった。魚もつかめない女子高校生2人が、2日間魚河岸で魚の見分け方やアジのつみれの作り方を勉強することになったのである。

河岸では返事の仕方が悪い、声が小さい、動作がのろいなど怒鳴られたり注意されたり。また時にはよくできたとほめられたりと大変な2日間でした。しかし、大満足とはいかないまでも2人は見事にそれをマスターしたのである。そのあと、コメンテーターが、その女子高生たちの変身ぶりを見て一言、「学校の先生方も勉強して欲しいですね」と。

この言葉を聞いて私はどきとした。私たちは子供たち一人一人のことを考えて一生懸命指導して来たはずなのに。ところが、指導者(教育の)としては全くの素人?と聞いていい魚河岸の人達が魚もつかめない、勿論、魚をさばくことなどできない、返事もろくにできなかった高校生を見事に変身させたのである。河岸の人達が彼女らを変身させるための特別な技術を持ち合わせていたとも思えない。その仕事への情熱(経済的な理由もあるだろう)がそうさせたものと思う。私たちも見習わなければならないことがたくさんあるように思えた。

今、教師も含め大人は、子供たちを叱らなくなっていると言われています。ダメなことはダメとはっきりいう。叱るべき時は叱り、注意すべき時は注意する。子供たちは注意されればしっかりとそれを聞く耳を持っているはず。教師も発想の転換をし子供たちのために、そして、我々自身のためにがんばらなくてはと思います。教育のプロとして。

芭蕉が13日間も・・・



栃木県中学校長会副会長
西那須野町立西那須野中学校
校長 清水 儀夫

芭蕉が「奥の細道」の旅で一番長く滞在したのは那須の黒羽で13泊しています。なぜ、江戸を出たばかりの黒羽でそんなに長く足踏みしていたのだろうか。学説とは多少異なるかもしれませんが、私なりに考察してみました。

第1に、難儀する旅で触れ合った土地の人の親切心と子供の純真さに心が和んだからだと思います。元禄2年陽暦の5月、芭蕉は曾良を伴い大田原を通過して黒羽へと向かいました。那須野が原は行けども行けども果てしない荒野、心細い思いをしたのでしょう。草刈りしている男に野道の苦しさを訴えて頼み込むと、草を背に載せて運ぶはずの馬を快く貸してくれました。途中、人なつこく馬の後に付いてくる子供ふたり、童女の名を「かさね」といいました。そして、夕方、芭蕉たちは黒羽余瀬の俳人翠桃宅にたどり着くというほほえましい逸話があります。

第2に、師を思う弟子たちの情の厚さが嬉しく、また、芭蕉自身が師と仰ぐ人への思いがあったからだと思います。桃雪と翠桃兄弟は、江戸づめのころ、芭蕉に俳諧を学び、師芭蕉の別号「桃青」の1字を貰うほどでしたから、師を大歓迎し、雨模様の中、玉藻稲荷や那須八幡などを案内し、芭蕉も大喜びであったようです。また、芭蕉は、座禅の師であり、心底尊敬していた仏頂禅師が修業していたという八溝の山奥にある雲巖寺を訪ね、1句詠んでいます。

第3に、山懐にある小さな城下町で、愛弟子たちと納得のいく俳句創作ができたからだと思います。芭蕉は翠桃宅で歌仙を催し、参会者ともども36句を作ったのを始め、黒羽で幾つもの俳句を作りました。町内あちこちに多くの句碑が残されています。こうして、芭蕉は黒羽で十分に休養した後、いよいよ山陰の東北陸奥の国に分け入るのです。

私は、芭蕉を長期滞在させた郷土を誇りに思うとともに、いつの時代にも通じる人への優しさと師弟愛、それに学問や道を究めることの大切さを芭蕉から学び、生徒たちにも話しました。

言葉を正しく



栃木県中学校長会副会長
佐野市立西中学校
校長 矢野 隆

「いらっしゃいませ。今日はどんなご用件でしょうか。」客の青年は「鍵。」と一言。「分かりました。すぐ用意しますのでお待ちください。」

「あの、無くしたら?」
「その時はお客様の方で、弁償していただくことになります。」

ある時、お店のカウンターで別の用件で待っていた私の耳に流れてきた会話だった。店員の親切な応待に対し、青年の一言で済ませてしまう会話。「話は最後まではっきり言え」と言われて育ってきた世代の私だから、特にもの足りなさを感じたのだろうか。

そう言えば、学校現場でも生徒が先生の所に来て「先生、数学。」などと話し、「数学がどうした。」と言いなおさせられている場面を見受ける。

今は情報化社会の発達等によりカタカナ語が増え、短縮語などが便利に使われている。これも言葉の流行の1つとして良いかも知れない。しかし、言葉は主語・述語を用いてこそ温かく、表現力豊かでユーモアのある会話が生まれてくるのではないだろうか。

過日、地区の教育研究発表会で小6担任のU教諭が「相手を説得するための討論の在り方」として、意欲的に実践しているすばらしい発表があった。自分の主張を論理的に筋道立てて的確に表現し、相手を説得できる能力を養うことができると考えての指導は、正しく話す・聞く能力の基本だと感銘した。と同時に、このことを不易のことと感じ、正しい日本語を使わせるために各分野でも厳しく取り組む必要性を感じた。

現在の流行語・短縮語を当たり前の日本語として勘違いしている生徒がいるのではないだろうか。それは大きな間違いであることに早く気付かせたい。そして、国語力低下が叫ばれている今、教育現場からも日本語を正しく使うことを一層押し進めたい。

言葉を正しく使うことは、自己を見つめ、深めることであり、ひいてはそれが「生きる力」の育成にもつながると信じている。

全日中校長会研究協議会 茨城大会概要報告

事務局長
宇都宮市立泉が丘中学校
校長 犬塚 恒士

第54回全日本中学校長会研究協議会茨城大会は、「豊かな未来社会を創るたくましい日本人を育てる中学校教育」を研究主題とし、10月23日(木)・24日(金)に茨城県水戸市を会場に開催された。なお、これに先立ち、10月22日(水)に全日中常任理事会及び同理事会が開催され、本会より柿崎会長が出席した。

以下、研究協議会の概要である。

- 1 日程
 - 10/23 ・開会式 ・全体協議会 ・分科会
 - 10/24 ・文部科学省説明 ・全体会
 - ・記念講演 ・閉会式

- 2 概要
 - (1) 全体協議会

全体協議会では、東京都より『「確かな学び」を推進する学校づくり』、また、北海道より「校長会の在り方」についての実践研究に基づく提案がなされた。
 - (2) 分科会

8分科会に分かれ、研究主題にせまる提案・質疑が展開された。
 - (3) 文部科学省説明

特に、10月7日に中央教育審議会答申を受けて、今後の教育改革の方向及び『「確かな学力」を育む「分かる授業」』の展開例に等々について資料等を用いて説明をされた。
 - (4) 記念講演

演題を「動物にみる子育ての原点」と題して、元上野動物園長でミュージアムパーク茨城県自然博物館長の中川志郎氏が多数の視聴覚資料を用いて講演された。長年の動物との関わりの中から得た動物の子育てとその後の成長について、「イヌに何かが起こっている」「ライオンはなぜ仲間を攻撃しないか」「サルたちの問題行動」などなど豊富な事例を基に子育ての原点を探った興味深い講演であった。

- 3 その他

主会場は、千波湖のそばの茨城県民文化センターで、好天に恵まれたなか、本県からは柿崎会長をはじめとして40名弱の会員の参加をいただいた。参加者はもとより、支えていただいた全会員に感謝申し上げる次第である。

研究学校の発表概要

塩原町立箒根中学校長
小林久夫

個々の違いを認め、
一人一人のよさや可能性を高め合う集団作り
～各教科等及び体験活動を通じた望ましい人間関係の醸成と
自尊感情（セルフエスティーム）の育成～

1 はじめに

本校は、文部科学省、栃木県教育委員会、塩原町教育委員会より、平成14・15年度の2か年にわたり人権教育の研究学校の指定を受け研究をすすめてまいりました。

人権教育としてスタートした、最初の2年間の取り組みということで、集団の中で、教科を中心とした「学ぶ場」としての学校と今後の「良き社会人の基礎を培う場」としての学校という両方の意味で、学校における人権教育はいかにあるべきかを研究してまいりました。

2 研究主題・副主題のとらえ方

「個々の違いを認め」とはそれぞれが掛け替えない存在であることをお互いに認め合うことです。その中で「一人一人のよさや可能性を高め合う集団作り」を行うことを目指しました。

お互いの人権を尊重し合う学級集団は、個々人の存在感を高め、「楽しい学校」につながります。よさや可能性を高め合う学級集団は、社会の偏見や矛盾に対して協同して取り組もうとする共通意識を育みます。

以上のことを踏まえ、副題として「各教科等及び体験活動を通じた望ましい人間関係の醸成と自尊感情（セルフエスティーム）の育成」としました。

3 研究内容

【研究企画部】

(1) 研究課題

人権感覚を養い人権意識を高めるための方策と研究方針の策定及び各研究部門の連絡調整

(2) 実践事例

- ① 基本方針や全体にかかわる研究・環境整備
- ② 各部の研究についての連絡調整・予算審議
- ③ 生徒の自尊感情に配慮した成績表の見直し
- ④ 不登校生徒等の学習保障の手だての検討
- ⑤ 人権教育の常時指導の計画作成と資料提供
- ⑥ 「人権を考える週間」の設定と啓発活動

【授業研究部】

(1) 研究課題

人権意識を高め、個々人のよさや可能性を高め合う学習集団作り・主体的に学習する授業の在り方

(2) 実践事例



＜研究大会風景＞

- ① 各教科、道徳、学級活動と人権教育との関連を図った年間指導計画・重点指導項目の策定
- ② 道徳、学級活動を中心に人権教育の視点に立った授業の実践
- ③ 構成的グループ・エンカウンターの手法を取り入れ、自尊感情を高める指導法の工夫改善

【体験活動部】

(1) 研究課題

人権教育を意識した体験活動を通して、望ましい人間関係の醸成と自尊感情の育成

(2) 実践事例

- ① 文化祭での共同制作（巨大ちぎり絵等）
- ② ほうきね活動（生徒会活動）
あいさつ活動・奉仕活動・音楽活動
- ③ ふるさと活動（総合的な学習の時間）
- ④ 二人二鉢運動
- ⑤ 金魚の飼育（その誕生から）
- ⑥ 創作劇「My Dream」（H15年度3年生の取組）

【調査広報部】

(1) 研究課題

生徒・保護者・教職員の人権感覚、意識を高めるための啓発活動の在り方の工夫

(2) 実践事例

- ① アンケート調査と各種広報誌の活用
- ② 映画鑑賞・講演会・演劇鑑賞等の啓発活動

4 研究の成果と今後の課題

生徒・教師・保護者ともに人権感覚・意識の高まりが見えた。今後は地域を巻き込んだ教育活動の工夫などが必要に思われる。

平成15年度 各専門部活動報告

◆ 総務部

部長 高橋勝也（宇・陽西中）

今年度の各種要望書、次年度の運営方針及び活動の重点等の策定にあたり、総務部会で原案を練り、事務局と協議を重ねながら進めてきた。

- 1 第1回部会（4月22日 教育会館）
平成15年度役員選出、事業計画等の協議
・部長 高橋勝也（宇・陽西中）
・副部長 江面一雄（河・古里中）
副部長 大木洋三（下・栃木東中）
- 2 義務教育振興協議会要望書起草委員会への意見を集約（6月17日、7月4・30日、8月11日）
・委員長 小林幸正県中学校長会副会長
・要望書の提出～知事部局・県議会等（9月3日）
- 3 第2回部会（7月14日 教育会館）
平成15年度県中学校長会の要望書案の策定
- 4 県教育委員会義務教育課との教育懇談会（8月18日 プラザ・イン・くろかみ）
小学校長会と合同で実施、要望内容について説明し、義務教育課より回答をいただく。
- 5 第3回部会（9月25日 学生協会館）
平成16年度の運営方針及び活動の重点案の検討
- 6 各地区での要望活動（9、10月）
- 7 政策懇談会への要望書検討（12月1日 旭中学校）
- 8 義務教育費国庫負担制度の堅持を求める緊急集会に参加（12月11日 憲政記念館講堂）
- 9 第4回部会（1月15日 教育会館）
平成16年度の運営方針及び活動の重点案の策定
- 10 理事・協議員会に平成16年度の運営方針及び活動の重点案を提案（2月12日）

◆ 調査部

部長 篠原拓夫（宇・宮の原中）

調査部では、4月の部会において今年度の事業計画をおおよそ次のように決定した。

◆ 事業計画

- 1 全日中教育情報部が全国で実施する「中学校教育に関する調査」に応じ、本県の状況を調査し報告する。
- 2 各学校で関心の高い教育課題について全県的に調査を行い、資料を提供する。
- 3 他県、各教育関係団体との連携・協力並びに資料・情報の交換・提供等を行う。
これらの計画に基づき、次のような活動をしてい

る。

◆ 実施状況

- 1 「中学校教育に関する調査」について
全日本中学校長会教育情報部の要請に基づき、県教委に協力をいただき、回答を作成・報告した。
なお全中学校長会では、全国からの回答を冊子にまとめ、既に全会員に配布している。
それによると、管理職手当や退職後の再任用・再雇用等は、県によりバラツキが大きい等の興味深い結果も出ている。
- 2 教育課題についての調査について
「選択教科の実施状況」などの案が出されたが、検討不足のため、次年度への継続課題とする予定である。
- 3 情報提供等について
必要に応じ、適宜対応する。

◆ 研修部

部長 犬塚恒士（宇・泉が丘中）

- 1 平成15年度研修部会
第1回（4月）組織検討
第2回（5月）研究大会 研究体制
第3回（7月）研究大会 研究課題
研究大会（9月）
第4回（11月）研究集録 研究担当検討
第5回（12月）研究集録取りまとめ・発注
第6回（1月）研究集録確認 研究課題作成
- 2 平成15年度研究大会
(1) 研究テーマ
豊かな未来社会を創るたくましい日本人を育てる中学校教育
～生徒一人一人を生かした特色ある教育活動の展開～
(2) 全体発表・分科会
第1分科会 — 特色ある教育課程
板荷中 向田伸一 校長（上都賀地区）
第2分科会 — 規範意識
氏家中 岡田正 校長（塩谷地区）
第3分科会 — 学校間の連携・交流
須賀川中 鈴木文子 校長（那須地区）
(3) 講話
演題「子どもの変化と遊び活動」
講師 常盤大学助教授 中村正之氏
- 3 平成16年度の方角
(1) 研究課題
基本的に今年度の研究課題を継続
(2) 研究大会（案）
・期 日 平成16年9月10日（金）

- ・会 場 栃木県子ども総合科学館
- ・提案担当地区 (安足・芳賀・宇河)

◆ 事業部

部長 中山 一郎 (宇・国本中)

去る12月11日(木)、教育会館大会議室において、栃木県教育委員会福利課職員を講師にお招きし、事業部主管による栃木県中学校長研修会を下記のように開催した。約60名の参加であった。

主 題 「退職後の生活設計について」
 日 時 平成15年12月11日(木) 13:00~16:00
 場 所 栃木県教育会館 3階 大会議室
 内 容

- 1 開会のことば (阿部 茂) 進行 (神長 利光)
- 2 あいさつ
 - ・栃木県中学校長会 会長 柿崎 龍夫
 - ・栃木県教育委員会福利課課長 飯田 昇 様
- 3 講 話
 - ア 医療保険について
 - 共済給付担当事務次長 葎田 昌 様
 - ・退職後の医療について
 - ・任意継続組合員制度について
 - ・継続医療制度について
 - イ 退職手当について
 - 福利厚生担当課長補佐 浜野久仁子 様
 - ・退職手当について
 - ・退職手当の算出について
 - ・各種の税について
 - ウ 年金制度について
 - 共済給付担当主査 福井 浩之 様
 - ・退職共済年金の内容と仕組みについて
 - ・退職共済年金の支給について
 - エ 教育福祉振興会 退職者部会について
 - 退職者部会担当班長 手塚 保雄 様
 - ・退職者部会について
 - ・退職者部会の加入の仕方について
 - オ その他
- 4 質疑応答
- 5 閉会のことば (阿部 茂)

難解だと言われる退職金や年金の仕組みであったが、説明もていねいで分かりやすく、校長先生方は概ね理解ができたように見受けられた。しかし「よく分かる」ためには何度か参加するとよいのではないかと思われた。

◆ 広報部

部長 下 司 恵 子 (宇・瑞穂野中)

平成15年度栃木県中学校長会の会報発行に当たっての広報部の構想、部会の開催、会報の内容等については、次の通りであった。

- 1 平成15年度の会報の構想
 - (1) 会報は年2回発行する。(99号、100号)
 - ・内容はこれまでとほぼ同じ。第100号は記念号とする。
 - (2) 専門部については、前期号(99号)に活動計画を、後期号(100号)に活動報告を掲載する。
 - (3) 99号100号共に8ページ編集を原則とする。
 - (4) 最後の「編集後記」は、副部長が執筆する。
- 2 部会の開催
 - 第1回 平成15年4月22日(火)
 - 県教育会館。本年度役員決定、編集方針等について協議した。
 - 第2回 平成15年7月3日(火)
 - 県教育会館。会報99号、100号の内容、執筆者の依頼等について協議した。
- 3 会報の発行と主な内容
 - ・第99号 平成15年9月12日発行
 - 内容 会長挨拶、役員所感、退任に当たって、各専門部の活動計画、新任校長の一言、私の朝会訓話等。
 - ・第100号記念号 平成16年2月12日発行予定
 - 内容 100号に寄せて、役員所感、全日中茨城大会報告、研究学校紹介、各専門部活動報告、海外教育事情等。
- 4 その他

100号記念号は元会長のお二人に「会報100号に寄せて」と題して、また研究学校紹介は「人権教育」について箒根中学校にご執筆をお願いした。

◆ 進路対策部

部長 影 山 房 興 (河・明治中)

平成15年度の研究主題を「中学校進路指導の適正な推進と高校教育改革の提言」と定め、3回の研修会を開催した。概要は次の通りである。

- 第1回研修会
 - 1 期 日 平成15年7月8日(火)
 - 2 内 容
 - ・今年度の事業計画の確認
 - ・昨年度の研修のまとめの確認と今後の課題について
 - ・県立高校及び私立高校入学者選抜に関すること
 - ・その他情報交換

第2回研修会

- 1 期 日 平成15年10月21日(火)
 - 2 内 容
 - ・県内全中学校に依頼した私立高校及び県立高校入学者選抜に関するアンケート調査結果のまとめ
 - ・県立高校への要望事項の検討
- 「県教育及び県立高校長との懇談会」実施
- ・11月11日(火) 13:30~ 宇女高にて
 - ・中学校の要望事項についての回答を求めた。

第3回研修会

- 1 期 日 平成15年12月12日(木)
- 2 場 所 栃木県教育会館
- 3 内 容
 - ・11月に実施した懇談会の報告
 - ・今年度の活動のまとめ
 - ・次年度に向けて
 - ・その他情報交換

今年度は県教委・県立高校との懇談会を初めて実施した。高校入試や一日体験学習などについて忌憚のない意見交換が行われ、有意義であった。是非来年も実施してほしいという声が多かったので、来年度も継続してほしい。

◆ 生徒指導部

部長 酒 井 一 行 (下・石橋中)

- 1 研究概要

【研究課題】

 - ・いじめ、不登校、暴力行為など、今日的な課題への適切な生徒指導体制の確立
 - ・性に関する指導、薬物乱用防止教育等の一層の推進
 - (1) 第1回研修会 4月22日(火) 教育会館
 - 今年度の組織づくりと事業計画作成
 - (2) 第2回研修会 10月17日(金) 教育会館
 - 各校の実践事例の発表と協議
 - 生徒手帳の編集
- 2 第2回研修の紹介

研究課題について、各校の実践事例を発表し、併せて情報交換を行いながら課題解決に役立てることにした。

【実践例】

 - (1) いじめ、不登校、暴力行為など、今日的な課題への適切な生徒指導体制の確立
 - ・適切な校内研修及び指導体制の確立
 - ・生き生きとした学校作り、分かる授業の実践

- ・実態の把握と意図的、計画的な対応
 - ・共通理解を図った予防的・継続的指導
 - ・人権及び生命尊重教育の推進
- (2) 性に関する指導、薬物乱用防止教育等の一層の推進
 - ・学級活動、保健学習における指導
 - ・講演会及び薬物乱用教室等の開催
 - ・日常的指導
 - (3) 各種関係機関との連携
 - ・スクールカウンセラー、心の教室相談員等
 - ・家庭、地域、周辺校及び公的機関との連携

◆ 修学旅行部

部長 後 藤 明 (宇・豊郷中)

今年度は、関東地区公立中学校修学旅行研究発表会が、宇都宮市の「プラザ・イン・くろかみ」で開催された。県内外の校長を中心とした180名の参会者のもと、宇都宮市立国本中学校と栃木市立栃木西中学校の研究が発表された。修学旅行部の活動は発表会の準備運営に重点がおかれたが、今年度の活動の概要は下記の通りである。

- (1) 4月22日 第1回県修学旅行部会(教育会館)
 - 役員選出、事業計画、関東修学旅行委員会役員選出
- (2) 5月30日 関東修学旅行委員会総会並びに第一回研究協議会(さいたま市)
 - 研究発表会(栃木大会)の要項の提示・説明
- (3) 6月10日 第2回県修学旅行部会(教育会館)
 - 列車申込み、実施報告、研究発表会の打合せ
- (4) 7月10日 平成17年度修学旅行輸送申込み及び修学旅行実施状況報告書のとりまとめ
- (5) 9月19日 輸送計画調整(東京)
- (6) 10月7日 茨城県との輸送計画調整会議
- (7) 10月17日 研究協議及び輸送計画決定
- (8) 10月28日 第3回県修学旅行部会(プラザ・イン・くろかみ)
 - 研究発表会の準備・打合せ
- (9) 11月14日 第39回関東地区公立中学校修学旅行研究発表会(プラザ・イン・くろかみ)
 - 午前準備及びリハーサル・午後発表会
- (10) 11月20日 「平成17年度修学旅行新幹線輸送計画書」配布
- (11) 1月 「関西の旅」の申込み
- (12) 2月5日 役員代表者会議
 - 年間事業活動反省と新年度対策
- (13) 2月19日 新年度事業計画案協議

〔海外研修視察記〕

快適であかるいケアンズ 上三川町中学生海外派遣に参加して

上三川町立明治中学校 影山 房 興

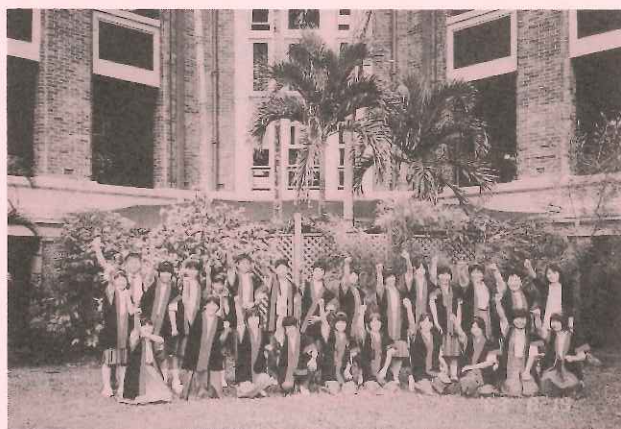
8月15日に出発した時は雨でしたが、ケアンズは晴天でした。先週までの雨を感じさせない、天候に恵まれた1週間でした。冬とはいえ最低気温17℃ですから日中は汗ばむほどで、日本の春の陽気です。

この研修は天候だけでなく、人にも恵まれました。明るく元気いっぱい生徒達、ホストファミリー始め現地の人達のフレンドリーさ…。スージー先生とゲイル先生は特に印象に残りました。スージー先生はホストマザーもおやりになり、さらに私達一行のコーディネーターとして、精力的に活動してくださいました。語学学校のゲイル先生の授業は動きとスピードがあり、間断なく課題が出され、グループ編成もどんどん変わり、既習内容も繰り返し質問され、身体で覚える授業で工夫がいっぱいです。先生はいろんな生徒に声をかけ、やる気を喚起しています。表情も豊かで褒めるのもうまく、惹き付けられてしまいます。休憩なしの2時間が短く感じました。

この他印象に残っているのは、1日目のスクールツアー、2日目の上三川パフォーマンスそしてクッキングの授業です。スクールツアーは1時間程度校舎内外を見学します。出会った生徒達はみんな明るく生き生きしていて、楽しそうでした。詳しいカリキュラムはわかりませんが、学ぶ目的がはっきりしていることと、自己の選択で学ぶということが大きいと感じました。高校卒業後は大半親元を離れて就職するようです。日本との教育制度に違いはありますが、生き生きと楽しそうな授業態度には感動しました。パフォーマンスタイムは、業間に中庭で行われましたが、日本や上三川を紹介するには絶好の催しです。『さくら さくら』のリコーダー演奏や『ソーラン節』の踊りは大好評でした。その後の調理室での1、2年生と組んでのクッキングも楽しかったです。1人に2名の中学生と一緒に組んで、ランチに食べるものを作るのです。少人数の共同作業ですから否応なくコミュニケーションを取らなくてはなりません。言葉はもちろん、身振り手振りを駆使して伝え合います。初めはぎこちなかったのが少しずつうち解けてきました。隣のランチルームでテーブルセッティングをしていよいよ食事です。作った

メニューはそれぞれ違うのでたくさんの品目が並びます。楽しくおいしい食事タイムが終了すると語学研修の修了式です。担当の先生から修了証が手渡される感動のセレモニーでした。

振り返ると8日間はアツという間でした。ケアンズは治安もいいし、国民性は明るくフレンドリーで気候もさわやかでした。私が出会った人達は自国にプライドを持ち、自国の良さ（美しさ）を大切にしようとしています。そのためには多少の不便さは我慢しています。路上に自販機がないのも鳥などにむやみに餌をやらないのも、これからの子どもや自然を守るためです。道路はロータリーも多く、ゆったりと回って右折をします。クラクションの音は滞在中1度も聞きませんでした。自分たちにとって快適な生活を自分たちで作り出す——『自己責任』という言葉が脳裏に浮かびました。表面は明るく屈託のない彼らですが、自分を知り、やるべきことは自分なりに考えていて、自分の人生は自分で切り拓いているなど強く感じました。



〈ケアンズ ステート ハイ スクールにて〉

〔編集後記〕

本会の会報も100号という記念すべき節目を迎えることができました。

年度当初の県校長会広報部会で、100号特別記念号として特別企画の会報にすべきかどうか検討の結果諸般の事情から（予算・内容面等）従来の会報に準じました。

今回の発行にあたり、元会長の篠原俊雄先生、須藤光弘先生を始め、執筆下さった先生方のご協力に心から感謝申し上げます。

寒が明けたとはいえ、まだまだ寒い日が続くと思います。どうぞ先生方十分にご自愛のほどお祈り申し上げます。

（秋元）